

## 共同性の構造

——特に成員性について——

はしがき

人間存在、易しくいって人間、あるいは存在、更に縮めて漢字で示される「倫」は、一字でもって共同体とその道（共同性・共同体であること）の意味を有する言葉である。外来語には倫に当る一語はない。それは恰も国語の「ひと」が自・他・世人・多数人・世間・一般人・人類・人格等の意を表わすのに引換へ外来語には一語で此迄意を含蓄する言葉が見当たらないようなものである。

この共同体の道、共同性は英・独語等に翻訳するのになかなか困難な言葉である。納得できるような適訳が今のところ見当たらない。和訳辞典の共同関係項目をあれこれ探しても共同性といった訳は見当たらない。共同なる語は単独にも成語にも可成用いられているのに共同性となると、和訳上の問題なのか原語に十分な意味がこもらないのか、何れにせよ見当らない。人間存在における真の共同が、西欧諸国では国家においても社会においても未だ実現していないのかあるいはまた理

解が及ばないのか、何か空ぞらしい漠然とした——つまり抽象的觀念的形式理論、偏った主義観に眩らんでいるような——取上げ方をして、ああでもなくこうでもなく、一見説論はまことに巧緻になってゆくのに、社会・国家の健全性は、人間性の強調の正にその故の裏書の如く毀れてゆく一方なのである。

われわれは倫字のお蔭で、また仏教哲理、就中華嚴宗の四法界觀の中の理事無碍・事事無碍法界に、観る事(体)・理もと一体、事・事もと一体に円融するという法即存在即生命即宇宙の洞察に助を得て、論題のように英訳した。

成員性も、構成員・成員・メンバー等の語が使われる程は余り日常目にもとまらず耳にもしない語であるが、ここでは役割・分担(role)とか資格(qualification)の意味を含むものとして membership を見立てて考える事にした。この成員性——それはカントなどが判断における思惟の四機能の一つとして挙げている判断の量(Allgemeine, Besondere, Einzelne)の中の Besondere 特殊によって想到される

渡 辺 寿 伝 治

ものである。そして恰もこの三種の量別に因んで、この共同性を新たに全体性・成員性・個別性の三要素として捉らえ構造分析を試みるのが本論である。この間にヒューマン・サイエティなるものの共同性の欠如様態が自ら明かになると思う。

#### 一 社会という用語の検討

#### 二 シナ上代に見る「社会」の意味の要点

#### 三 共同性の概念規定

#### 四 共同性の構造と原理

#### (一) 人間関係の多様性と相互媒介性

易理の展開・相互媒介性(相互依存性・相待性)の図式説明

#### (二) 構造・機能・国語による呼称例

#### (三) 応用篇

仏教哲理による共同性の構造と機能の分析

四法界観・十玄縁起六相円融観・十住心・十牛図頌・五位

百法

#### 五 「社会」に関する所論・参考文献とその取上げ方の要点的批判

#### 六 結び・註説明

### 第一章 「社会」という用語の検討

我国明治初年以降逐次その使用が頻繁となり、政治・経済・法律・外交生活上の事象の取上げに常識用語とまでなり、今や我物顔に国民国家共同体の共同性に取って代り、その健全な成長を阻害していると思われるものに「社会」なる用語がある。この「社会」は文字としては古くシナにその語義の根本を求めねばならぬものであるが、明治以降外来語の *society*, *société*, *Gesellschaft* 等の邦訳に際しいろいろの迷いや苦心があったようであるが、とにかく会社・交際・世態・社会なる訳語にしほられて来て、遂に明治十四・五年頃専ら「社会」が採用されるに至る由来がある。その間の事情を「社会科学事典第四巻」(平凡社 昭和二十四年第二刷 二三九頁)がよく紹介しているが、当時の訳語例として同書は次を示している。仲間・一致・交り・仲間交り・風俗・民俗・社・会社・仲間会社・人間会社・仲間会所・人間仲間・衆民会合・世俗・人間世俗・俗化・交社・人間公共・交態・社交・人間交際・交際・世態・社会等である。今試みに時代を下って、岡倉由三郎「新英和大辞典」(研究社 昭和二初版)、中島文雄編「英和大辞典」(岩波書店 昭和四五年)、岩崎・河村編「新英話大辞典」(研究社 昭和四〇)等の訳語を見るに、社会・公衆・世間・社会団体・社交界・上流社会、会・協会・学会・組合・団体・講、社交・交際・同席・人前、友・つれ、(動・植物の)社会、群集等が採用されている。この中の世間 (the world) を出しているのは岡倉氏のもののみである。昭和二年頃では、まだ人の世・世間の語感が残っていると思われる。ついで The Oxford English Dictionary, reprinted 1961 や

Webster's Third New International Dictionary, 1965 では、固より英英辞典であるから同義語的な一語を最初から出す訳にもゆかぬであろうが、いわゆることの次第が誰が読んでもその意が分るように事分けて説明陳述的である。出典の原文例も豊富でなかなかのものである。しかし、扱これから此を漢字か国語で一語二語で訳し切ることになる、明治も昭和も同時代になるような困難に見舞われる。勿論和訳では漢字が使えるので如上の例となるが、用語例はあっても肝心の社会の内容となる概念や観念がさっぱり分らぬから、社会学・政治学・経済学等の専門書でその意味を探らねばならなくなる。この見地で明治の諸氏の訳出を見るに、社会の共同性・協同性——この潜在感としては、当時心情においてはまだ日本における具体的な地縁共同体、それは隣家の隣人・村落の村人・藩国的故郷即郷国的おくにの人等に通じている世の中・世間の感じがまだ実際に血を通わせていたことに基いているからであろうが——の気分が、その地味な訳出の中にほのめいているように見える。西欧の *society* は *socius fellow, companion* から出ているが、邦訳の友・なかま・つれから同じくその共同性を公共的に拡大しつつも、日本の世の中・世間がまづ地縁共同体に適合するに對し、それは経済的組織・文化共同体・民族共同体内の局部的あるいは抽象的・一視点的總括による浮動的浮游的に離合集散している人間の何らかの一まとめに対する呼称であって、自然的且日常常統的な人びとの集合統一体を指すものとしては不適當な訳語なのである。西欧では社交は上流階級での事であったから *society* がまづ

社交社会とか the upper classes of a community whose movements & entertainments & other doings are more or less conspicuous (The Concise Oxford Dictionary, 1970) という用例を有するのは適切である<sup>①</sup>。しかし一体全体その社交や上流階級の人びとの集りに如何なる常住的共同性を具体的に、参与・参加する人々全員に統一性・規定性として見出しうるであろうか。ここにもその共同性がそもそも何を意味するかが問題になるのである。

長い年月を通して夫婦・親子・兄弟・家族・親族・隣家・村人・同国人にその共同性のもつ私的性格と共に公共的性格を拡大しつつ世の中・世間を我々の具体的直接的乃至は自己目的々、無媒介的生の表現として理解してきたが、明治の文明開化と爾後の社会化（今では市民化）への傾斜によって、農村の人によっては、そこが人類の場でもあり、国家の場でもあった世間・世の中の持味を殆ど洗い去ってしまった。土地抜き・地縁抜きの人びとの、恰も数学集合論的な取扱ひ、余りにも人為的作爲的な社会結合観、手に立至ってしまったという実情では、人間疎外・人間離脱・精神病や非行の増大・退行性疾患の増大・公害問題に見る非人情と残酷な生存競争・科学を悪用する進歩的近代の利己心の満足等々人間らしい真の共同性の存否を疑わせる事象が際限なく生起して来ることは明かであろうのに。多くの人びとはそこに気付かない。言葉の乱れは世を乱し、世の乱れは言葉を乱す良い例である。

## 第二章 シナ上代に見る「社会」の意味の要点

諸橋氏「漢和大辞典」(大修館 昭和一八)、上田氏等「大辞典」(講談社 昭和四三)、服部・小柳氏「詳解漢和大辞典」(富山房 昭和二二)等にはその意味の一つとして、二十五家の組合、古く廿五家を一つの自治団体と見なし、共同の一社を建て、祭神を祀りまた公共の利益を計ったものの意を同様に載せている。中文大辞典・辞海等の場合も同じである。ところが貝塚氏「漢和中辞典」(角川書店 昭和四十四七版)によると、字義の方は前と同様であるが解字には「形声。土の転音が音を現わし、たがやすの語源(藉)からきている。耕作の神の意。ひいて土地の神と考えられるようになり、またそれを祀った建築物をもさすようになった。昔から社が村落の中心的地位を占め、事あるごとにそこに集って団結のきずなを固めたところから、人間の組織集団を社と呼ぶようになった。」と説明している。これは注目すべき解釈で、前三著及びシナの辞典が土地神を取上げているのに対し耕作神を打出しているところに着目すべきである。然し何れにせよ農に関して共同祭祀する神を祀り、地縁を紐帯とした日常生活共同体である。従ってそこでは警備・防災等で起り得る人命の危険を物ともせずまた喜怒哀楽の生活感情の共同もある訳である。さてこの祭神が土地神であるか耕作神であるかの詳細な検討を試みているのが加藤常賢氏『書社及社考』である。

氏は書社を取上げ、その文献的証拠と通説を述べ、次いで書社はまづ

租藉の仮字なりとし、更に社・藉(藉)同源説を展開する。そして社神が耕作神であり、藉は耕作の意であるとする。また土田即ち社田を藉田と解し、藉田は本来耕作田であるが、労力を以て公田を耕作して上納したところから耕作の意が租税の意となり、藉田が税田の意となったとする。そして是により書社が租藉であることが強ち無稽の論ではないと論証する。従って書社幾百の出典例は租税幾百単位の意と見得るとする。氏の論は確かに卓見の一異論であり、昭和一八年以来今日までその論証は通用しているのではないかと思つて氏の「漢字の起源」(角川書店 昭和一六)に再度その意を求めたが、生憎社の字の項が見当たらないので、如上の見解の成行については今ここには何とも言えぬが貝塚氏のものにもかと出ているから、依然として注目すべき意見には変りないと思われる。しかし此処では土地自体あるいはそれに関わる事象を神と観たことを知ればよい。それ故倫理的には社の共同性が神かけて地縁に根をおろし、日常の生産労働即生活のすべて、言換えると生産労働は単なる欲望充足の爲の手段ではなくて、それが自己目的々になされるところに人間共同性の真なることの自証自修を意味することであることを見失わねばよい。周代行政区画では、二十五家を一社・一里としたが、みちのりで一里は約四〇五米と言われた。五家を比といい、五比を閭としたから里と閭は同意であるが、閭は里門をも意味する。村里の一まとまり、約四百米四方の地上の住人の共同生活の展開に社の字の持味を読み取り度い。

会は一つになる・一致するの働らきの意と、同上のこと・寄り合

い・集まり・同志の集い を意味するから、社の意にある祭祀の爲の集会・あるいは防災・警備のための非常の集会を当然意味し、またその意を強めていると考えられる。

問題は如上の土地と離れず、地縁に即して親子・夫婦・兄弟・家族・親族等の主として血縁を紐帯とする共同体の親近性・信を、より大なる公共性に展開（止揚）している地縁共同体、その道は教育勸諭にも示された博愛の道（これは西欧クリスト教的四海同胞愛・隣人愛・人類愛と同義の博愛とは別物である）を考えることである。また衆に及ぼすの衆は弱の譌字であり、解字では多くの人を示す衆（三人）とその人人の所屬する地の意を示す□とから成るから、合せて弱・衆となり、地上のある族に属する多くの人を意味する。此点でも現今の大衆の如き浮動・浮游的に離合集散する群的乃至は多数の孤独者とは異なるのであり、また署の字の皿は網の目を張るの皿であるので衆は人びとが地上に確かと定着し緊密に心結ばれ離れることの出来ないその人びの意にもなると考える。因みに前に引用した里の項の比は註にも触れたが隣に同じい。比隣と成語もするが、比隣五家でわが家と相近接する隣家であるから、隣人はこの隣家に属する人の意であり、もともと土地縁と切離せない人びとなのである。血縁に勝るとも劣らぬ程の愛を血縁共同体の私的閉鎖性を越え、より公共的に広い地上に実現しようとするのが人間存在における地縁共同体の意義であるから、このように地上に密接した意味を有つ社会を、事もあろうに *Society* の訳語として定着させ、仏教的にも由緒あり、人間存在の時間性と空

間性の構造を一語の意味内容としている *Loka* の訳語たる「世」字を活かした世の中・世間の倫理的意義を逐次見失はせるに至ってしまっていることは注目すべき事柄である。

又前記の如く、羅典語では結合している仲間を *socius* と言ったが、その結合している人びとの団結体を *societas* という。そしてストア学派での用法はギリシャのいわゆる都市国家即ちポリスに対し人間の団結体を單純に意味したものであるから、ポリスが一定の土地画面上に特有の共同性を鮮明に表出したのに比べて、ソキエタースは必ずしも土地を考慮しないでも済む、兎に角一まとまりの人びとを指すには適当である。C. T. Lewis: *A Latin Dictionary for School*, 1964 (Oxford) . . . *societas* fellowship, association, union, community, society と英訳している。ひとまとまりの人びとも地縁とは異り、否むしろ地縁を意としないで、合意とか契約により或るつながりを保っている人びとであるから、地縁ならではの情誼に事欠くに至っているのは当然であろう。しかし合意にせよ契約にせよ、何か一つ事がある目的のために共同して行うことが利あるところから、社の意の根底である地縁を捨象して、単に共同事を一にする意味をも有つに至るのは、単一共同の生業が、君主の交替による施政方針の変更・戦乱・天災・交通機関や通信手段の速度化による情報伝達・文化伝播の迅速広範開化、住民の人口や健康上の異変による他地域への流出移動等と相俟って経済的文化的に多岐化職業化してゆくことも起るからである。それはまた、自己目的々価値追及の生活、快樂幸福・欲望充足を第一

義とする生活、利益あること・役に立つこと・有用であることを第一義とする生活の三者がさまざまに入れ替り、生の価値が時に逆倒して来ることを意味する。逆倒するところでは、生の深刻な共同性の発露としての献身・犠牲・奉仕もその自発的自動的自律的な持味を喪失するに至る。そこには功利・打算・妥協による共同性の欠如が表面化する。

司馬遼太郎は「日本人と日本文化」(D・キーン共著 中公新書

昭和四七)のはしがきにおいて、キーン氏との関係を、「太平洋という水溜まりをへだて、あの戦争を共同体験したという意味において互いに戦友であったという以外にない。残念ながら私にとってあの戦争が何ういう意味をもっていたかは自分ではよくわからないが、すくなくとも日本文化という一個の世界からみればあの戦争がなければこの文化はドナルド・キーン氏という天才を所有することができなかったであろうということだけはいえる。……戦争はこの少年を日本語を学ばせるといふ運命にひきずりこんだ。やがて日本文学という人類がもった特異な世界は力強い普遍性のつばさを付けるといふ仕事をこのひとはになった。……」と述べているが、ここに言われるような共同体験とか互いに戦友であったという事などは、ここで取上げている共同性とは些も関係のない誤用に近い代物なのであるが、此頃はこのような虚妄の共同感や連帯が何か意味ありげに国境を意としないで、眼を人類に向ける視点では認められつつあるのは何としたものであろう。

### 第三章 共同性の概念規定

一 共同体の共同性は、部外者(所謂新なる第三者・当事者以外の別人)に対し、その成員となるための参与・参加を何の程度に何んな仕方方で許容しうるかによって、他の共同体との比較において「より開放的」「より閉鎖的」の二相を呈するものである。例えばオヤコ共同体の共同性は、夫婦共同体の二に対しては第三者の参与(子の出生)を許すから「より開放的」であり、兄弟共同体に比するときは、オヤコは父・母・子の三人の相互媒介性に基づく三人を越えることができないが、兄弟の方は三人に止まらず十人以上にもなることが時に自然でもあるから(兄弟は二人・三人でも然りであるが、この二や三は親子の三の如く、その成立根拠の始源において三に限るような相互媒介性の規定を受けない。四人・五人となればそれは明らかである)、兄弟に対しては関係が「より閉鎖的」となる。兄弟はオヤコ関係の重層する間の子供の相互依存・相待関係であるから、同一父母の子という点で、自ら出生数の消長による閉鎖性を有する。無制限に増大することは事実上生理的に不可能である訳である。然し「兄弟に友に」の友愛の道を名とする共同体である友人関係は、兄弟愛を特に文化共同体の道として数の上で無制約的に拡張、且「より精神的に」展開することに成功したものである。この意味でオヤコの共同性に対する兄弟の共同性の開放性は血縁的共同性と精神的共同性との不即不離なることを媒介し保証するものなのである。夫婦共同体は何処までもその二に規

定され、第三者の介入に対し徹底的に之を拒否し、時には死を以て防禦することもあるところに、紛れのない十全の概念を構成しうるものである。しかも相互の内部相関は一〇〇%望まれ、その実現に努め、その人生の一生涯は生存中はもとより、その死後にもわたり、あるいはまた生前や結婚前の果しない因果と縁との意義を修証することにもなる。因みによく引例される一夫多妻なる観念は、一夫一妻に限定される夫婦の概念に基けば、その一夫一妻が同夫において重層している状態と解し得よう。決して一夫と多妻とを夫婦成立の規定とはしていないので、当該一夫の、たまたまその者に限る特権の認容に基く人為的結合関係であるとするに止まるものである。この特権を除いて考えれば、いわば一種の公的姦通に墮すると見る可きものである。このように考えれば、夫婦は何処までも閉鎖的に終止するところに、同時に内部的相互の最も公的な相関・参与が無限に実現されることになるから、人間存在の共同性は夫婦に一つの極を有つと言える。しかもこの事実が、その閉鎖性にも拘らずむしろそうでなくてはならぬと公的に認容されるとところに大きな意味を有つのである。恰もこの夫婦の一極に対する他の極の意義を有つものは、その中にあらゆる種類と数の人間共同体を要素的にも包含しつつ、しかも徹頭徹尾・至大至広の共同性を独自の・公的に有つが故に、我國ではこれを讀ぶにオオヤケと称した程であるが、その歴史と風土との規定を受けるところに、実に公的であるが故に反って理念的にはその私的閉鎖性を有意義に自覺する国家共同体の二重性格が現われる。このことは国家は自己の理念的私的閉

鎖性を統一性として自覺すればする程、更により一層公共性を増大・増進させるといふことなのである。世上多くの人びとの口にのぼる人類共同体とか人類社会とかは、国家共同体の共同性の理念的反証となるものであり、人類に托される理念的公共性は、実は何処までも国家共同性の弥いよ増大しゆく無限的極限の表現なのである。我われは人類を夢みるところに、国家の共同性の無限的拡大を、国家自体はその公的開放の一切許容的な姿において捉えているのである。このことは、国家は己の内にも外にも無限の多様性を許容しつつ、そここそ弥いよ益ます自己の共同性の統一的な公的性格を露わにするところに国家的統一の自覺の根底を有つものであるということなのである。④夫婦と国家の間には共同性の実現の広狭の度により、親子・兄弟・家族・親族・経済的組織・文化共同体・民族共同体等を挙げねばならないが、ここでは共同性の二重性格を指摘するに止めたい。かくして、共同性の概念として次の如く規定し得る。共同性とは、「共同体が自体において『より公的開放的』・『より私的閉鎖的』な二重の性格をその共同体特有の統一的规定性として現わしつつ、成員すべての自覺の主體的実践の道とすること」である。

#### 第四章 共同性の構造と原理

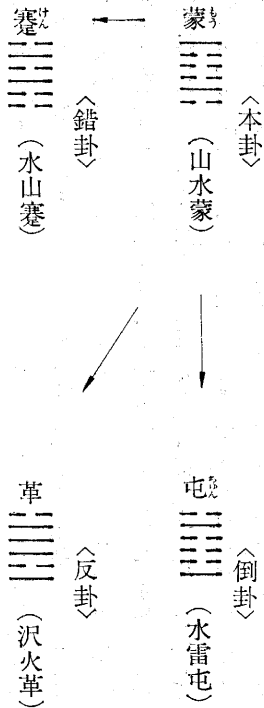
##### (一) 人間関係の多様性

##### ○ 易理の展開——人間関係生起の予見

易経の易理では大成の卦六十四卦の各六爻について、同じ陰陽でも

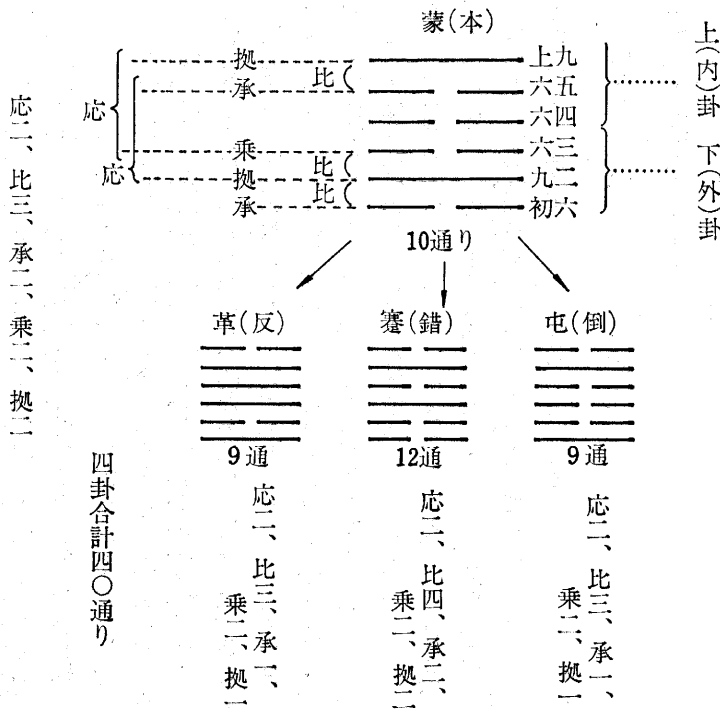
それぞれ独自の特色を有った爻辭を分別しているから、正(本)卦だけについては六×六四〇三百八十四通りの爻辭があり、これが人生におけるあらゆる事象のいはば最少の見出しとなっている。またそれらは常に統一の視点を失わないで人間の真実の一理をこと分け示しているのである。しかし人生万般の事象は無数に生起し、時にその三三四通りの分類項目では整理に困難と疑義を生ずるので、本卦を倒さずにしてできる倒卦、小成の卦たる上卦と下卦とをそのまま入れ替える錯卦、六爻の陰陽を反対にして組立て直した反卦等をも併せ考え、更に六爻相互間の関係については、応・承・乗・挽等を考えるから、正に易窮まれば則ち変ずで、一爻のもつ意味は幾通り、幾重にも深まり広まってゆくことになり、易理による処置判断の万全且つ正鵠を期し

図一



四卦の相関につき考察する時は、本卦の一爻についての三変を数えうるから四×三八四〇一五三六通りの相関的解釈が許される。必要によりこの変卦の更にまた変卦を幾重にも系列化すれば、恰も整然たる易マングラが展開する。

図二



うることになる。

易理はシナ上代にあっては、治者層の君子修学上必須の課題であ

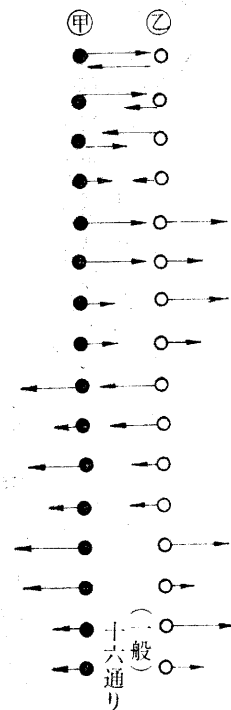
り、既に当時においても古典的意義を有したものであるが、更にまた卜占の資としたことにより、人智の偏向・固執の偶然性を截断するのに恰好の具ともなったのである。自我意識を離れ数理的統計論的整理の学に信を置いて人生体験を符合させ、卦辭にも爻辭にも常に共同的連帶的解釈をしようとした易理には、改めて倫理的意義を肯定させるものがあると信ずる。当るも八卦、当らぬも八卦の俗見に關りなく、我われの合理的・理性的判断と思考訓練とに大いに資するものありと思われる。

○ 相互媒介性——成員の心理状態による媒介性の強度の予見

今のところ考えうる総ての人間関係を凡そに類型化した場合、成員数をその全体性成立のための十全条件としているのは、夫婦の二人、親子の三人の場合のみである。人間は如何にしても一人ではなく、最少限二人の成員間の共同性に始まるのであり、一人の人間とは、実は何等かの人間関係の成員性が一時的欠如状態に在ることを意味する以外の何物でもない。

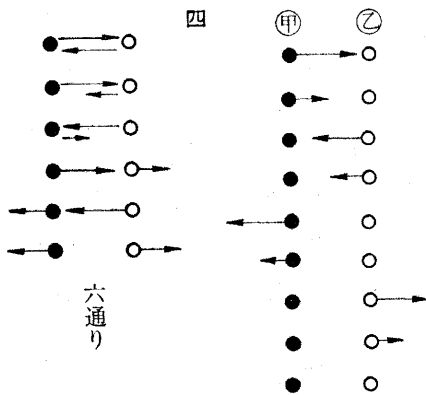
故に、人間関係はまづ一般的にも二人の間の心理図式の型を基体（単位）として開展し相關するから、そこより考察する。心の向う方向を矢印で示し、強度を強弱の二段に簡約しこれを線の長短で示し、心理の方向を同方向（左右の片方追駈・片方逃避）と異方向（双方吸引・双方反撥）、双方の立場の交換との見地から、今、強弱二、同方向二、異方向二、立場二の組合せを求めると2×2×2×2十六通りとなる。これに無關心（双方・片方）を考えると二五通り（2×2+5）あるから、

図三



（無關心）九通り

図四



これを合すると二五通りあることになる。(図三)

→は相思想愛・完全型、他

は不完全。今ここに、媒介性を強める意欲を示せているものに、反撥についてはその強度を平均の一色として特にこれを組み込み、無関心は全部省略すると左となる。<sup>(四四)</sup>

今  $n$  人間の任意に結びうる二人関係の数  $P_n$  は、 $P_n = n + \frac{n(n-3)}{2} = \frac{n(n-1)}{2}$  式で表わされるから、二人の間の心的・行動的関わり合い方

(先に示した心理図式の型数) を一般に  $k$  通りとすると、 $n$  人間における相互の関わり合い方の総数  $Q_n$  は、 $Q_n = k^{P_n} = k^{\frac{n(n-1)}{2}}$  と表わされる。

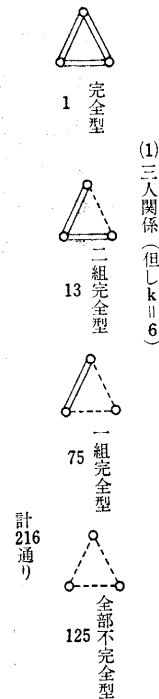
例えば  $k=6$   $n=3$  の時は  $6^3=216$  通り  
 $k=6$   $n=4$  "  $6^6=46656$  "  
 $k=10$   $n=3$  "  $10^3=1000$  "  
 $k=10$   $n=4$  "  $10^6=1,000,000$  "

(百万)

まことに物凄く数の心理の交錯と人間の相互媒介性の様態である。成員総てが全員強度に吸引し合うものならば、全体性は常に簡明の一通りを示すのに、そこに少しでも強弱があり、ましてや方向や立場が変ると如上の長大な大変化を将来するのであり、人心を一に向はしめ一に帰せしめることが如何に至難であるかが分ろう。ここに我われは衆心を一に帰さしめ合せしめる道、衆心は一に帰する修養の道を考えねばならないのである。

(四五) (四六)  
 今少しく図式の型を例示すると、

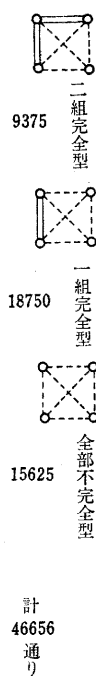
図五



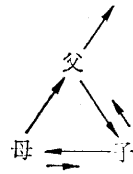
(2) 四人関係 ( $k=6$ )



図六 説明の二例



(父が他に女性あり)  
 身寄りのない母は父だけが頼り。ところが父はつきまとう母を逃げ他に或る女性と心通わせている。しかしそんな父・母でも子に対しては、思いおもいに愛する。子供はその様な父・母に迷惑している。

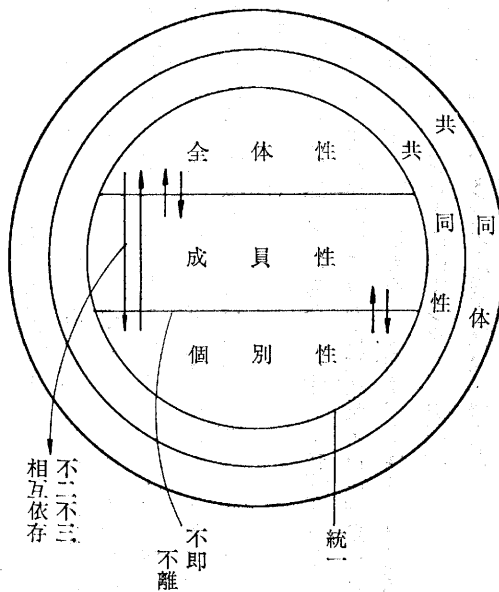


父は母を捨てて他に女性関係がある。母は愛をつなぐと努める。子はいたく母に同情するが、母は父のみに関心あり、子に愛想がない。

このように考えうる事例を予め出来るだけ設定し考察しおけば、易理に優る人生相談もできることになる。紙数の関係上、爾余の具体的諸例は割愛させて頂くが、要は諸子におかれて色々考察されるとよいと存ずる。

## (二) 構造・機能・国語による呼称例

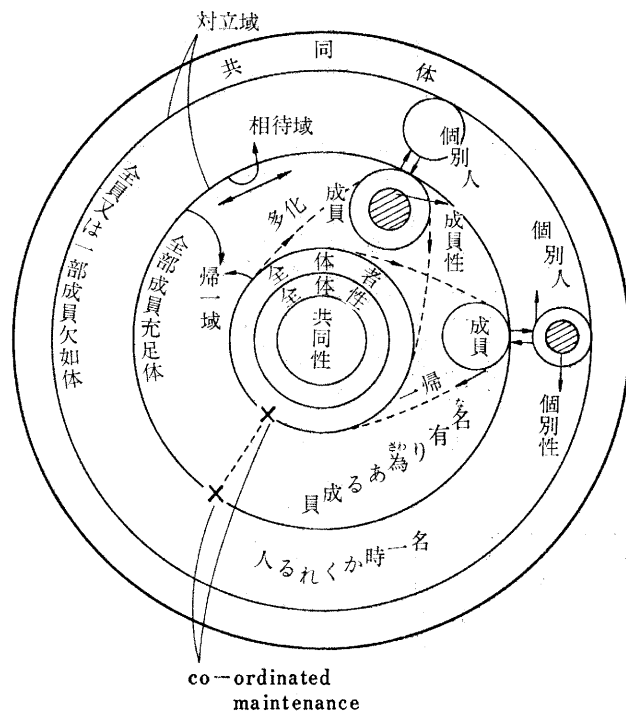
人間の学としての倫理学での理解の立場をとる本論では、倫理学の出発点の表現・了解に充ち満ちた日常生活の事実に明かな、人びとの作る具体的間柄とその成員との考察からその間柄と成員との間の相互依存関係に見る明かなその二重性格を、実はそれが絶対的全体性から出てくるという以外に言い様のない二重の否定の運動——絶対的全体性の自己還帰運動——により統一されているものと見る。ただ和辻倫理学では、成員よりは「個人」の呼称を採って間柄と対比させ記述している。現代の個人主義、それも利己的なそれに狎れている人びとの誤解の恐れと、その故にまたその理解の欠如も起き兼ねることを考え、ここにその個人を成員と呼び直し、多くの人の個人観にあるその個人を新たに個別人（あるいは単一人・人一人）と呼び換え、ここに共同体の構造、機能を主として図式化により取上げる。



第七図は人間存在・共同体・間柄・仲・主体的実践的行為的連関等と同義語的に呼ばれるものの実体と理法とを併せて共同性と規定し、その共同性は全体性・成員性・個別性を三契機として己を表出し、この三者における相互依存・不即不離・不二不三を機能とする構造を示す。

第八図は第七図の構造の三契機の機能的配位状況を示す。全体性と成員性・成員性相互の間にそれぞれ第一相待が表現的に実現している。

図七 共同性とその三契機の構造



る。J・Sホールデン<sup>⑦</sup>氏の言う coordination theory は外人に珍しく、この領域に立入っているものである。

第九図は、二共同体にわたり、橋かけの役を果たしつつある個人を

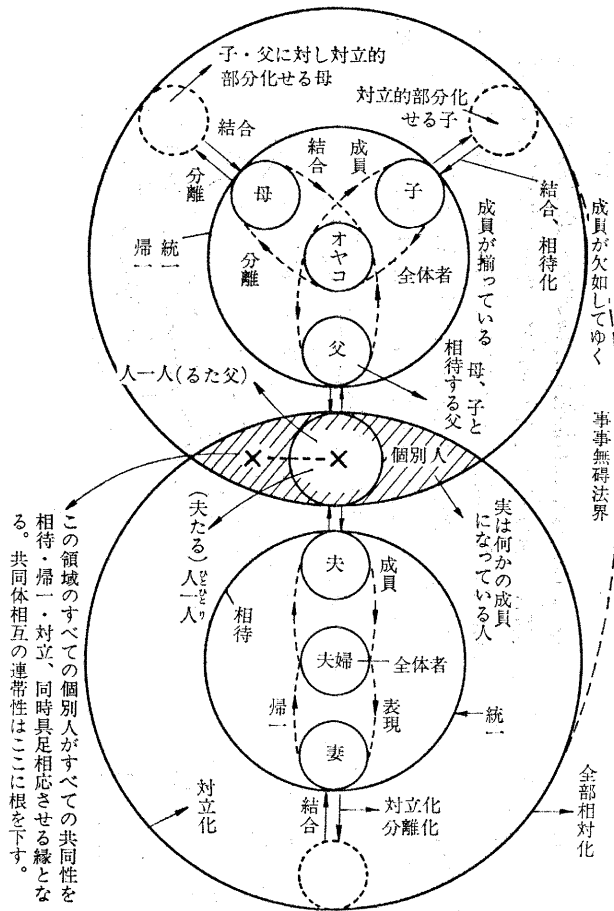
中心に共同性の展開状況を示す。華嚴の哲理の一端を寸見させる。

第十図は、一人（実は人一人・個別人・名なき為なき共同性の欠如者）が万役を包蔵する状況を示す。万役の内奥に父母未生以前の我が何かしらちらっと見えつ隠れつしていると見て取らせる。しかしそれは実は母は母として、妻は妻として、姉は姉として即共同体オヤコ・夫婦・兄弟……等として現はれるがままに現はれつつあることを一切拒まず、在りのまにまに振まうところに真人の無位は万華と現われているのである。

第十一図は共同体の機能とその進展を示す。全体者↓成員↓個人  
↓成員↓全体者の一連の運動が二重の否定運動・自己開頭還源運動で  
あり無限に進展を続ける。そしてその運動は、全体者の自己拡張（成  
長）は表現作用により表現者に己を多化し、表現者（成員）はその延  
長として相互に相待し、多化の意義を充実・豊富ならしめ合ひ、やが  
て己を全体者の生命（共同性）に培ひ、包摂されるままに帰一してゆ  
く。成員は時時分離的に己を個別化し、やがて時来ればまた表現体の  
中に合入・結合してゆく。そして成員は全体者に帰一することによつ  
て、個別人への分離の意義をいよいよ更新し、新鮮な己を形成してゆ  
く。このことはまた「本から出る」「本にかへる」として表現しう  
る。

第十二図は事物根本関係の理で、その著「仏教哲理」「国家の研究」「雜誌神ながら」等により、明治晩年から力説されてきているが、何いうものか大方の学者層からは、取上げられるまでにいまだに至っ

図九 二共同体間における成員の状況と個人としての存在意義



ていない。この四根本関係は仏教の諸哲理を余りにも見事に捉え脱ぎ  
つくして及ばないところがない。仏教哲理もこの四根本関係とその理  
によって、清新な気風を人理解に及ぼすことになると思ふ。今こ  
こに要点を紹介(例による)する。

表現帰一関係 太郎の手即ち太郎 (の人格・人物・徳行)、太郎の

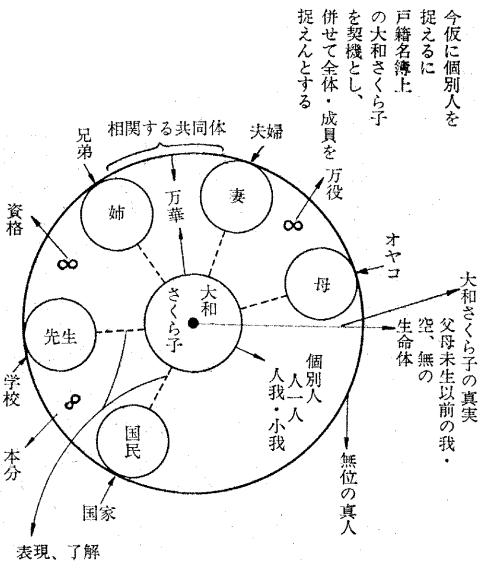
性を命じ要求する。手術してまでも手足を切断するのは、身体全体の  
生存のための要求である。胃は空腹となっても身体都合では、その  
欲望を抑制せねばならない。

全部相対関係 右の関係における全体も部分も、その支配服従の一  
方的在り方を拒み、時に部分が全体を支配し全体が部分の意に屈服し

足即ち太郎、口即太郎となる日常生活での感  
じ方は幾等でもあるが(日本民族の思考法の  
特長でもある)、一事を挙げ捉えて全を知り  
つかむ行方である。全一が此の様に関わる。  
表現相待関係 右のような手・足・口…等  
の間の相互依存・信頼・誠実の関係。相互に己  
を媒介とならしめ、その全をいよいよ美化し  
つつある。そこにある成員は共同の道の実践  
者でありつつ全体者に帰一しゆくのである。

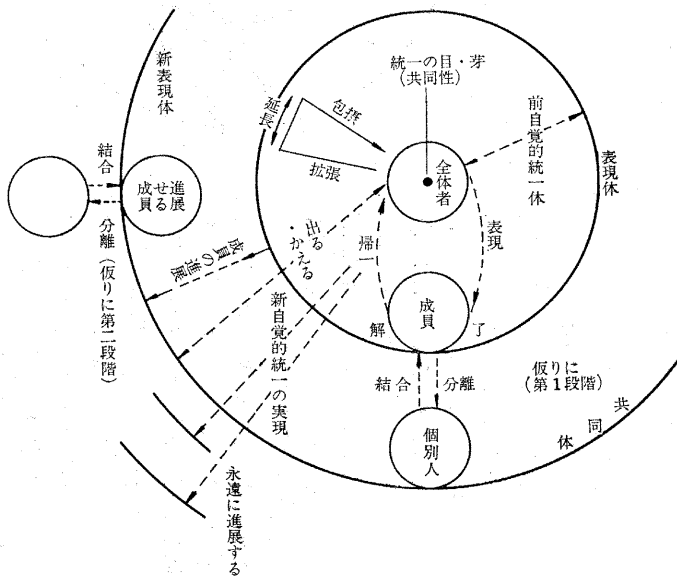
全部対部分関係 口も手も足も太郎と直ぐ  
には直接せず、したがってその表現者となら  
ずに、どこまでもその部分たるの立場にたち、  
たかだか太郎の身体構成要素・肉体の一部  
分たるに止まるが故に、身体全体との関係は  
形式であり、分離し独立してゆく方に傾く。  
全体はその支配に服させ、時に全体の為の犠

図 十一 一人万役



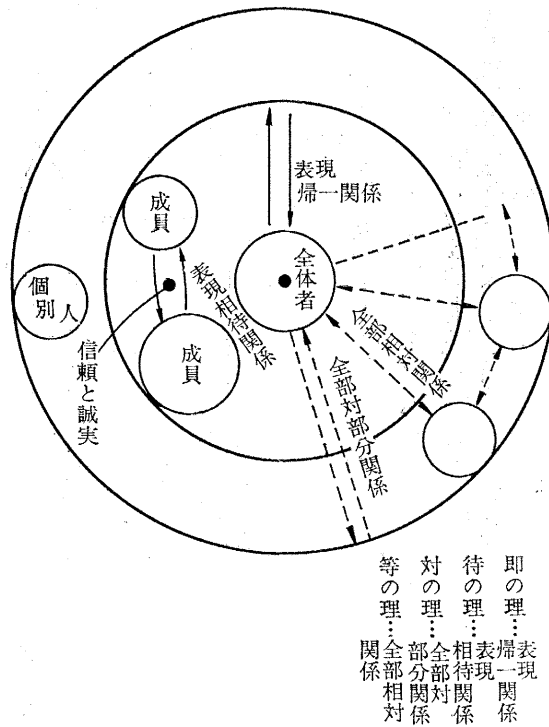
本来的位置を倒逆するに至ることがある。前述出術の時、部分が余剰いくばくもない生命を惜み通して、時機を失して身体全体の死を招く場合である。西欧の革命現象では下剋上を通り越した秩序の全面的改変が特に著しい。それはレボリューションであって、シナの革命とは、天命への共同のない新旧の交替である点で根本的に同一ではない。甚だ拙い例示であつたが人間生活万般につきこの四関係に当てはめえないことは一つもない。全部或部分の理は支配服従・権力の行使・

図 十一 共同体の機能と生命の進展・共同性の成長



義務の要請等で、それは対立するところに考え出されるものである。

図 十二 (故寛彦博士創案による) 事物根本関係とその理 (渡辺案) との関係 (図式)



全部相対関係は、事実上の対立に止まらず、そこに対立をすら破壊せんとする対立、対等の主張、否立場の倒逆をも意としない体のものである。既成差別を折あらばひっくりかへそうとねらう行方であり、互というもおろかに似て、油断も隙もない、全く虚々実々予断を許さないいはば対立なのである。

さて本論では四関係とその理を呼ぶに簡略し、これを即の理(とり

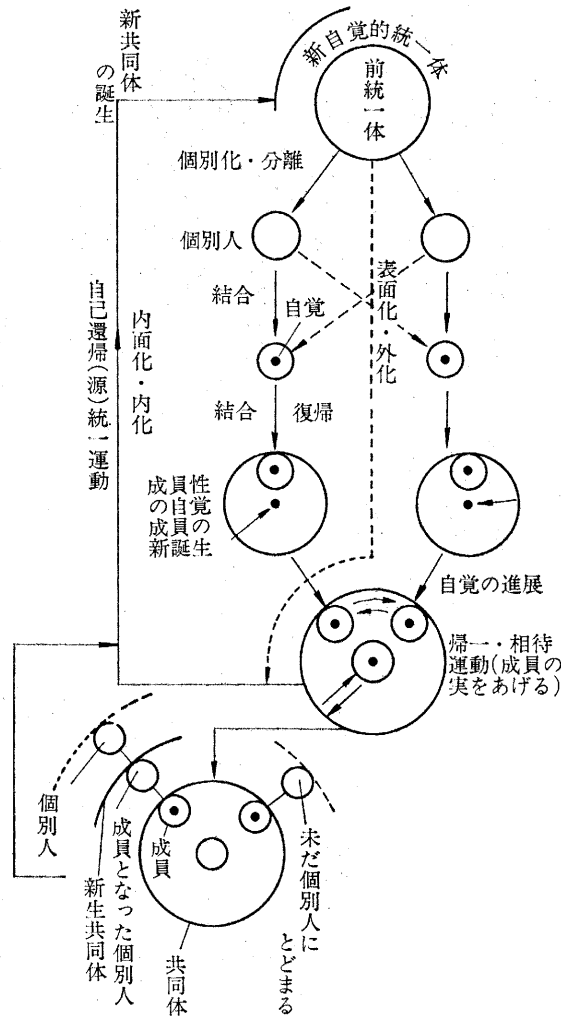
もなほさずの理、すなはちの理、直ちに(連続の場の発見)の理、自ら自らの理、乍(ながら)の理、それがそのままの理)とする。次に待の理(まちあふ理、よりあふ理、互の理、もの理)。次が對の理(したがへしたがふ理、との理)。次は等の理(むかいたつ理、いはの理)と試みた。私も行くといへば、私と貴方との間にすでに相待関係がある。私は何うする、貴方はどうするでは勝手にまかせて共同しない。後二者はアリストテレスの言う配分的正義・均分的正義の理に相応し、調和的正義・統一的正義が彼に欠けていることに気付く。

第十三図はことわけによりわけが分り、そこに共同体の自覚的自己還帰的統一が進展する様態を示す。

第十四図は絶対的否定性(絶対的全体性)と国家共同体の共同性等との関係を示す。

○ 国語による呼称例

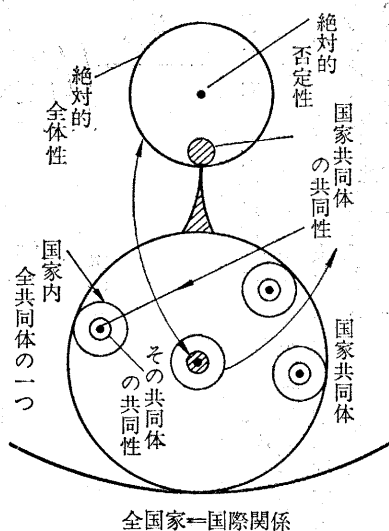
- |     |                        |
|-----|------------------------|
| 全体性 | (1) 分れすべての全き一つ中        |
|     | (2) あらわれ出るすべての元たる一つ中   |
| 総体性 | (1) すべてのをもらさぬ全き中       |
|     | (2) 中のあらはれすべての中        |
| 普遍性 | (1) 分れ出たすべてにあまねくあらわれる中 |
|     | (2) 分れ出たすべてにあまねき元たる中   |
| 成員性 | (1) 中のあらわれ名をもつすべて      |
|     | (2) 分れて分れぬ中のあらわれ       |
|     | (3) 全き一つにかかせぬすべて       |



- |     |     |                |
|-----|-----|----------------|
| 特殊性 | (1) | みなとりどりのかけがえのなさ |
|     | (2) | 中なす互の名のあるわけ    |
| 個別性 | (1) | 中に分れて相待つ互      |
|     | (2) | 分れて対い合う独り立ち    |
| 単一性 | (1) | ひとりひとりばらばら     |
|     | (2) | 名を離れた分れのすべて    |

- 個人性
- (1) 名のない一人一人
- (2) 中から離れた中はずれ
- すべてまだ熟さない試案に止るものであるが、わが国語の簡潔な表現をもって事態の真実のところを把握することになりたいものである。
- (三) 応用篇
- 仏教哲理による共同性の構造と機能の分析(未完・つづく)
- 四種法界観(親子に例をとる)

図 十四 絶対的否定性（空・無）の図



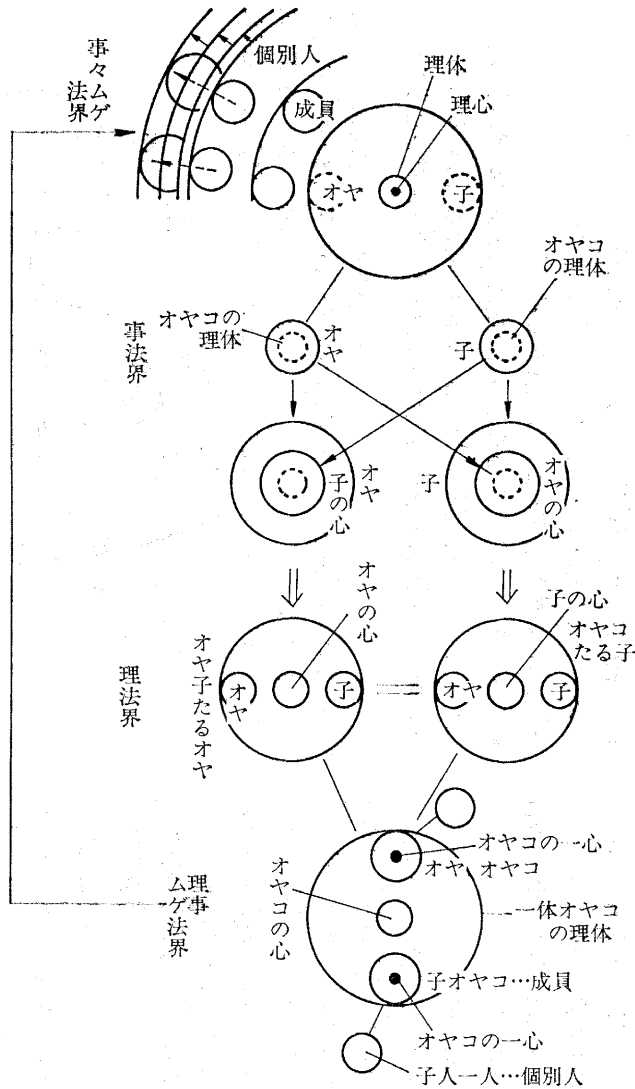
国際関係は公的現実在体群であり、この場における共同性がすべて、実はすべての国家の共同性の中に吸収されてしまうところに、どこまでも国家の共同性の公（オオヤケ）が深化・拡大される構造を有つ。絶対的全体性は最大公共同体なる有限の全体性を通してのみ現われる。

親子の「一つ心」に在った親子共同体の共同性も、その親子心が親心・子心の中に薄らいで来たり（既に心理図式に述べた様態を呈する）、あるいは一共同体から他共同体へ、その中の成員が移動（即ち本から出てゆく、分離してゆく）してゆかねばならぬ事情がおきると（通学・出勤・仕事等々）、そこに一時的にオヤコは父・母・子の一人一人、即ち（父なる）一人、（母なる）一人、（子なる）一人に分離することになる。即ち個別人になることになる。このように元の共同性から

一時離れることによって一つの共同性の欠如態に身をおく場合に見える人一人一つの差別的存在界は事法界に当る。このところでは父も一時父でない会社の職員になったり、子は学校の生徒に変身し、そこにはたらく心には、家庭の心——オヤコの心・兄弟の心・夫婦の心等は一時身を潜めることになる。そして職場人の心、学生の心が発動してゆく。あるいはそれは「親でもない」「子でもない」というオヤコ喧嘩による形を取ることもある。何れにせよ個別人の段階に入り、次いで他の仲をもつ成員の段階におもむく頃である。

次に職場にあって、ふと家のことを思いだし、親として親子を養うために働いている自分は成程親であると思ったり、また喧嘩した子供の事を思いだしたりして、自己が親であることを確信してゆく段階に入る。親はオヤなり、子は子なりの自覚が芽ばえる。ところが、ここにオヤだけのオヤ子はなく、子だけのオヤ子もなく、オヤ子というから（オヤ・子から出てきているから）自分は親自体でオヤと思つたが子がなければオヤとも言えないことに気が付く。子あつての自分が親であること、親あつてこそ我が「子の名」も有りと分ってくる。オヤも子も、もともと相互媒介依存的なオヤ子の成員としては同じであるということになれば、オヤと子とに分れたところで対立すれば差別性に身をおいたけれど、オヤと子とは離れ得ない成員の資格であると分れば、ここに平等的存在界、即ち理において平等の理法界が現前する。そしてオヤは子のために、子はオヤのために、己が心を相手の心としあつてそこに己れをあらしめ、オヤ子の一つをまた取戻そうと（成員

図 十五 四法界の図



ここにあっては共同性の理が遺憾なくあらわれる。  
すべてに拘泥しない。また矛盾が矛盾でなくなる。互が互を活かし合う。  
オヤ子は兄弟、会社、山、川、虫等々一事一物にも一切一事に通い合いゆく  
ことになる。こうなるといながら、ありのままに、すべてにさからわず又意も  
むかへず、己をさらさら離れ去ってまことに行きのまにまとならう。  
しかしこれはどこまでも四法界の理をふまえての上の話である。

として全体者への帰一の心の発動) 心  
新しくなり始めれば、やがてオヤも子  
も一日が終って家路につき、次いで家  
に入れば「やあ、お父さん」「お帰  
りなさいませ」「やあ、太郎君」「お母さ  
ん只今」等という水入らずのオヤ子の  
一心に成員は差別平等感から無差別一  
体感にひたることになる。ここに理事  
無碍法界が少し表面化し、やがてそこ  
には昨日も今日も明日も変わらないオヤ  
子の共同性の永遠性が成長してゆく。  
ここは理法界と事法界が交互に陰顯出  
入し合っているところ、しかも無碍な  
るところが取柄である。そこでは父・  
母・子は父・母・子の名にとらはれず、  
一つ呼吸に生きつづけ合っているオヤ  
コたる父一人・オヤコたる母一人・オ  
ヤコたる子一人の中の一人一人が融通し合  
ってオヤ子の名もそこには  
恰もなくなっているような、事事無碍法界を  
やがて現前することになる。ここに  
入れれば職場での苦勞も学校での苦  
心も総てこころよき思い出として  
生きつづけ、何事につけてもこのオヤ  
子一つの事に生かされ、やがて有難  
い職場あつてのオヤ子、有難い学校あ  
つてのオヤ子に発展

してゆく。オヤ子を中心とすれば世の一切の事物は奇しくも有難くもまことに不可思議にもその中に包摂されてくる。すると、そのオヤ子は自らのオヤ子たることも自己吸収して止めてしまひ、親子を感じずにしかも健全な親子として他のすべての共同体と融けあつて生き続けてゆくことになる。ここに事事無碍法界の本領が余すところなく開現してゆくことになるのである。そして、そこに人生の眞実・神髄<sup>(四十五)</sup>があり、宇宙の理が遍満すると見えて来ることもなるのである。

## 第五章 「社会」に関する所論・参考文献とその取

### 上げ方の要点的批判 (不載)

## 第六章 結び・註説明

第四章(三)応用篇の大部分及び第五章の全部を今回は省略しなければならなかったがその責めはまた続篇とさせて頂き、別の機会を待たせて頂くことになっている。

すでにお分り頂いたと思うが、現在での翻訳語的社会観、その極まるところが市民社会観になってきているが、そこでは眞の共同性が如何なる構造と機能をもつかが原理的に不明のまま、恰もポリスの共同性に対抗するソキエタースの観念的・非地縁的あるいは欠地縁的共同性こそが社会の根柢であるかの如く考えられている。国家はかつての国権の濫行使・誤行使にたたられ、国民が国民よりは社会人を自由で眞

実な呼称とまで考え過ぎ且つ考え誤らせるに至った点は欧米では十分に反省しなければならぬにしても、社会の不適切な翻訳語の導入配布の結果、小さな転びが今では我国までが抜き指しならぬ現実に至らしめられていることは誠に問題である。そこでは日本国家は恰も日本社会となり、日本国民は国旗も不要の社会人となる。シナの用語では一地方を指し、上海社会・蘇州社会と呼んだことはあつても、中国社会では既に国が否定されていなければならぬから成語にはなりえない。共同性全般の在り方については、既に論じた如く、地縁共同体ならでは育くまれぬところであり、したがって国土は有しても、地縁の心とは無縁の共同性の欠陥を残存したままの国土上の生活運営が続けられるならば一切の文化にも欠陥を生じない訳にはゆかないことを知る可きである。

この旧来のせまい地縁共同性のもつ意義を如何なる形でひろい国土上に発展させるかが、我々存立の大きな問題となると信じつつ筆を擱く。

註① Gesellschaft=Ge+sell+schaft の sell は Sall (大広間・ホール・サロン・会場・会議室と訳す) と解されるから、ゲゼルシャフトは Sall に集まる人びとによつて醸し出される、そこはかとなき交りを意味する。これは同地域の地上に生業を営みつづける人びとの交りとは別物であらう。

② 両辞典で目につくのは、社会の解として「或いは居住同地域の人を指して云う、上海社会・蘇州社会の如し」、「各個体間に一定の關係・共通の利益を具有す、此に循つて合作し以て一定目的を達するの組織体なり、普通

或いは同職業同身分の人を指して云う、「節日の里社の民の集会」等がある。蘇州社会の使い方は面白い。

③ 日本社会学会年報「社会学 第九輯 論説之部」昭和一八初刷 二六一九五頁

④ 統一のはたらきは、遠心的・求心的、開放的・閉鎖的、分裂背出・還源帰一、分離・結合、拡散・集中、本から出る・出たところに帰るなどの様に、二元的に方向を異にしつつあるようでその実はもとと一元的に作動し続けているところの統一（＝共同体）の同心円的且スバイラル的自己反出還帰運動である。有る（＝本）が故に有らしめ（分化拡大）有らしむるが故にいよいよある還源のはたらきも、古来我國では和魂とそのはたらきの二方向（幸魂・奇魂）を一元的に荒魂と呼んで、本である和魂自身の矛盾反対的自己同一、つまり統一体の生命の自ら自らなる発展的自己還帰運動の論理的且事理的且心理的把握を意味するものである。和魂は自ら荒魂を設定し（發動させ）和魂自身のはたらきを人間の徳行の上に成就させて永遠につぎることがないことを意味する。このはたらきは禪でいう修証一如の悟の意味でもあらう。因みに世尊の拈華は一境、迦葉の微笑は一機と云われるが、機は主観的な手だて・はたらき、境は客観的な手だて・はたらきと見て、悟は機・境のはたらきを通して在りといわねばならぬ。つまり悟は世尊一人のみにもなく、決してや弟子たる迦葉一人のみにもなく、いはば悟は共同性として二人が機境一如に揃って出ねば有りと無しとも言えぬことなのである。この世尊にしてこの迦葉ありというところに、ほほえましい天上天下唯我独尊の単伝があらうと考える。すべては共同性の自己開顕なのである。それは已れ一個のみに関ることではなく常に他己にも関り、常にその共同性への問いとして己と他己とを設定しはたらくものなのである。そしてそこに共同体Ⅱ統一者の面目が弥いよ發揮されてゆ

くのである。換言すれば共同体的生命の止みなき自己噴出なのである。このことはまた、かの道元禪師が正法眼蔵現成公按の中で「悟迹の休歇なるあり、休歇なる悟迹を長長出ならしむ」と云われている所である。これはまた「自己をわするるといふは、万法に証せらるゝなり、万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり」と同意であり、一つに共同性の開顕に関することなのである。そしてその無限の開顕は国家共同体の共同性において自覚的に統一されているという点が本論の主張なのであり、共同性の規定なのである。

⑤ 故寛克彦先生の私講の席での伝受事項（未公開なので詳論を控える）

⑥ 契について高田真治先生は「易经」（岩波文庫 昭二二初版 四一九頁）に「契とは陽爻を以て陰爻の上に挾るを謂う」とのみあって、同様に陰下陽上の承との別が明かでない。この点に関し加藤大岳「易学大講座第一巻」（紀元書房 昭和四四 二二版 三二項）の「承も乗も陰爻を基にして其の比爻に陽爻の在る場合に『承ける』『乗る』の見方をする事が多いのです」により、陽爻を基にして陰下陽上を挾ると解を試みた。もとより素人考えに過ぎぬので教示を頂きたい。

⑦ J. S. Haldane; The Philosophy of a Biologist, 1935 (Oxford at the Clarendon Press)

（本学助教授・倫理学）